

---

クラシック鑑賞記～コンサートホールへ行こう！

---

—◆—演奏会情報—◆—

2011. 10. 21 (金)

(会 場) 大阪 ザ・シンフォニーホール

(曲 目) [1] W・A・モーツァルト 交響曲第41番「ジュピター」  
[2] A・ブルックナー 交響曲第4番「ロマンティック」

(指 揮) スタニフラフ・スクロヴァチェフスキ

(管弦楽) ザールブリュッケン・カイザースラウテルン・  
ドイツ放送フィルハーモニー管弦楽団

—◆—鑑賞記—◆—

[はじめに]

実は、今回のコンサート。新聞でチケット応募の記事を見かけ、応募したところ、運よく当選し、聴きに行くことができました！

今回の指揮者、スクロヴァチェフスキ氏は、巨匠中の巨匠といっても過言ではないと思います。88歳という高齢ながら、そのすさまじい迫力は、今なお現役であることを伝えてくれます。

日本でも馴染みの深いスクロヴァチェフスキ氏ですが、彼の経歴を簡単に紹介させていただきます。

1923年ポーランド（現ウクライナ領）生まれ。幼い頃からクラシック音楽に精通し、ピアニストとしてデビューを果たすが、戦争で手に傷を負い、指揮と作曲の道へ進むこととなる。

ワルシャワ交響楽団の音楽監督などを務め、1958年にアメリカのクリーブランド管弦楽団を指揮し、アメリカへと活躍の場を広げ、ウィーン国立歌劇場をはじめとし、世界中の主要なオーケストラや歌劇場の指揮を定期的に行っている。

日本では、読売日本交響楽団と1978年に初共演の後、2007年に第8代の常任指揮者に就任し、2010年4月からは桂冠名誉指揮者を務めている。

さて、管弦楽は、たいへん長い名前だが、ドイツの放送系オーケストラで、2007年9月に2つの放送管弦楽団が合併して創立された、わずか4年の新米オーケストラだ。とはいえ、それぞれのオーケストラは歴史があり、その1つが、「ザールブリュッケン放送交響楽団」で、ドイツ南西のフランス国境沿いの町にあるオーケストラで、1936年の創設というから、歴史も古い。もう1つが、「カイザースラウテルンSWR放送管弦楽団」で、こちらは1951年設立なので50数年という中堅どころのオーケストラだ。カイザースラウテルンは、その名の通り、「カイザー（皇帝）」にちなんで名づけられた町であり、町そのものの歴史は古く、市内にある最も古い教会

は、1300年前後に建てられたものというから、素晴らしい。

今回のこの来日公演は、日本とドイツの交流開始150年という節目を記念して開催されている事業の一環として取り組まれたものだ。

ドイツのオーケストラの響きを存分に楽しみ、また巨匠・スコロヴァチェフスキ氏がどんな音楽を作り上げるのか、たいへんに期待できる演奏会が始まる！

それでは、演奏会の模様をお届けしていきます。

#### [1] W・A・モーツァルト 交響曲第41番「ジュピター」

当たり前といえば当たり前だが、プレイヤーは皆、ドイツ人を中心とした外国人。もちろん、日本人も数名（ほんの1人か2人）混じっているが、そういうことに圧倒される。

開演時間となり、ぞろぞろと（というより規律正しく←この辺りがドイツ的!）、舞台へと入場し、温かい拍手で迎え入れられる。こういう所が、いつもの演奏会と違うところだ。

調弦の後、ほどなくしてスコロヴァチェフスキ氏が登場。何か会場の空気が一変した。プレイヤーだけでなく、客席までもが何かしら緊張感というか、その迫力を感じ、ピンと張りつめた空気となった。それからすぐ、大きな拍手が鳴り響き、氏は深々とお辞儀をした後、指揮台へと向かう。

さっとオーケストラを見渡し、コンサートマスターとアイコンタクトの後、軽く予備拍（タクト）をとり、モーツァルトの柔らかな響きが会場を包む。その音が、何とも良い響きで、一瞬にして虜となってしまいます。こんなにも素晴らしいモーツァルトの響きを聴いたのは初めてかもしれない。日本のオーケストラには作り出せない響きだと思う。音楽の本場であるドイツで、切磋琢磨し、また作曲者たちが過ごした同じ空気を吸い、同じ景色を眺め、そこで感じた得たものが身体や脳を通じて、音として表出するのだから仕方あるまい。

88歳という年齢を感じさせない指揮は、とてもカッコいい。そして、オーケストラから引き出す味わい深い響きは、その重ねてきた年齢ゆえか、実に濃厚で、素晴らしい。終楽章の盛り上がりは、抜群で、1曲目からこんなに飛ばして大丈夫だろうか、つい心配になってしまいます。何と言っても、後半には、ブルックナーの大曲が控えているのだから。

#### [2] A・ブルックナー 交響曲第4番「ロマンティック」

今日の演奏会のメインプログラム。スコロヴァチェフスキ氏の得意とするブルックナー。

20分の休憩の後、前半のモーツァルトの響きに聴きほれた聴衆は皆、今か今かと待ちわび、先ほど以上の大きな拍手の中、再び指揮者・スコロヴァチェフスキ氏登場。さっと、オーケストラを見渡し、指揮棒を振りおろすと、低音が響き、第1楽章が静かに始まる。第1楽章には、ドイツ語で「Bewegt, nicht zu schnell」と注記されている。「動きを持って、あまり早すぎず」といったところだが、そのことを忠実に守り、低音の中からホルンの響きが現れ、管楽器のファンファーレへと繋がる。このファンファーレが絶妙に会場へ響き渡る。そして、全奏部分では、管楽器と弦楽器が一斉にハーモニーを作り上げるのだが、教会音楽のような美しい響きが広がる。それはそれは、圧巻だった。

一人一人のプレイヤーが、プロ意識を持ち、当たり前のことだが、音楽と対峙し、ブルックナーの音楽を再現していることが、その素晴らしさに繋がっているのかもしれない。加えて、内声パート（第2バイオリンやヴィオラ）が良い。このパートの音が、曲に深みを与えるので、その巧みさが曲の良し悪しを左右する。実にしっかりと響きで、メロディーパートを支え、曲の表情を豊かなものとして作り上げている。

第2楽章で、弦楽器のピッチカートの中、ヴィオラがメロディーを奏でる部分があり、ここが良い。リズム感が違う。アクセントの付け方が良いのだろうか。第3楽章のスケルツォは、生き生きとした表情が実にうまく演奏されていて、繰り返しの部分が飽くことなく、たいへん楽しめた。さすが！

あっという間の終楽章。ここまでずっと、勢いを失することなくやってきて最後、疲れ果てそうな思いもするが、むしろ、今まで以上の勢いをオーケストラ、指揮者ともに発揮し、会場の聴衆もその勢いに存分に浸かり、音楽を楽しんでいるといった感じ。フィナーレが盛り上がりを見せる頃、もう終わりかと思うと、無性に寂しい気持ちとなった。

最後の和音が会場に響き渡り、スロヴァチェフスキ氏が振り上げた手を静かにおろすと、会場からはわれんばかりの拍手と「ブラボー」の声であふれた。

奏者たちも、その聴衆の様子に圧倒されている感じだったが、実に素晴らしく、充実したコンサートだった。そして、心に残るコンサートの一つとなったことは疑う余地がない。

何度も何度も舞台へと呼びもどされるスロヴァチェフスキ氏は、疲れを見せることなく、聴衆に対し、また奏者に対し、深々とお辞儀をしては、拍手にこたえていた。奏者が下がった後も、拍手は鳴りやまず、フルート奏者と共に、再度、スロヴァチェフスキ氏が登場し、満面の笑みを浮かべ満足そうにお辞儀をして聴衆に挨拶していた。

聴き終えて、こんなに興奮したコンサートは、ほんとに久々だったと思う。久しぶりに（何年ぶりだろう？）、わたしも、「ブラボー」と声をかけていた。

[おわりに]

実は、先月の終わり、児玉宏氏指揮の大阪交響楽団で、同じ曲を（ブルックナーの交響曲第4番）を聴いていた。その時も、素晴らしいと思ったが、本場ドイツの響きは、またひと味もふた味も違ったものだった。加えて、88歳の巨匠が演奏するブルックナーは、その積み重ねてきた年齢だけ

深みのあるものだった。同じ曲を聴いて（版の違いもあるだろうが）、このように違いを感じられることが、面白い。どちらがどうと、甲乙を付けることは一概に出来ないが、このような違いを聴くこともコンサートホールで楽しむ楽しみ方の一つであることは間違いない。

あまりに熱くなりすぎ、終演後に飲みに行ったお店で、つつい飲みすぎてしまったことは、反省しなければならない。名演、ここにあり！